

新しい教育原理の可能性

著者	今井 重孝
雑誌名	川口短大紀要
巻	31
ページ	75-83
発行年	2017-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001121/



新しい教育原理の可能性

今井重孝

1. はじめに

教育原理のテキストはたくさん出ているが、教育思想、教育史、教育内容、教育法規などが中心に記述されていることが多い。また、複数の執筆者によって書かれていることが多い。その理由は、多くの教育学の専門領域があり、それらについて一人の執筆者が通曉するのは難しいからである。また、教育原理の取り扱う範囲が広いので、教育原理において、教育思想、教育史、教育内容、教育法規などの領域全体を関連づけて体系的に記述することが困難となり、知識が並列されるにとどまってしまうがちである。しかし、現実世界の中では、教育内容の中にも、歴史や思想や法規が関連しているようにお互い関連しあって存在しているのである。

こうした体系化の難しさに挑戦して、全体が関連付けられる形での教育原理のテキストの可能性を示すことが、本稿の課題である。

そのための手法として、ここでは、ある視点を定めてその視点から教育現象を記述すれば、その視点の一貫性により教育思想、教育史、教育内容、教育法規などの間の関連性が見えてくるのではないかという仮説に基づいて、論を展開することにする。

本稿においては、そのための視点として、ルドルフ・シュタイナーの主張するワルドルフ教育の視点を取り上げる。その理由は、シュタイナーが主張したのは、人智学的なものの見方であり、人智学というのは、人間の学ではあるが、人間科学 (Human Science) ではなく人間叡智の学 (Anthroposophy) だからである。

科学と叡智の学の違いは、科学は、無生物 (物質) の法則に基本的に依拠して構築されているために、物質法則の探求では素晴らしい力を発揮するが、生命の法則や生きた人間の法則を扱うには不十分であるというところにある。一例を挙げれば、自分の人生を科学によって決めることはできないので自分で決めるほかはないということが挙げられる。つまり人間の社会生活で不可欠の価値判断は科学の領域を超えているのである。しかし、通常人間にとっては、科学よりも人生の方が大事であろう。残念ながら科学は人間にとって一番大事な自分の人生をいかに生きる

べきかという問いには答えられないのである。

教育学は、人間の育成に関わる学問である。通常の学校は、悪人を養成しようとはしない。善人を養成しようとする。しかし、善悪は、科学の領域を超えているがゆえに、科学的な手法によって構築された教育学は、人間の育成には役に立ちにくいのである。シュタイナーの使用する言葉を借りれば、物質科学をモデルに構築された「死せる知識」によって人間形成はできず、植物、動物、人間といった生命体（生き物）の法則を知らないと「生きた知識」による教育はできないということになるのである。

以上の理由から、教育学の基本を教えるべき教育原理を、人智学的な観点から体系的に構築する準備作業を試みたい。

とはいえ、紙数も少ないので、教育史と教育思想と子どもの発達観の三つを取り挙げて新しい教育原理の一つの方向性を提示したい。

2. 人智学的な歴史の見方

教育思想にも教育内容にも教育法規にも歴史はある。従って、人智学的な歴史観に基づいて、教育思想、教育内容、教育法規を記述することもできる。では、人智学的な歴史観とは、いかなる歴史の見方をするのであろうか。ランケの歴史の見方、トインビーの歴史の見方、ヴォルフの歴史の見方、アナル派の歴史の見方などあるが、現在なお有力な歴史の見方は、近代史観と唯物史観であろう。こうした歴史の見方に対し、シュタイナーの歴史の見方は、徴候学的な歴史と名づけられている^①。この歴史観は、表面的な現象の背後に潜む深層の歴史の流れを読み解こうとする歴史観である。この歴史の見方の妥当性はどうかという疑問を持つ人もいるかと思われるが、妥当性は結局のところ、その見方が、歴史の説明として説得力があるかどうか、社会の未来を作り上げていくときに参考になる見方かどうかによって、判定されることになると思われる。それを決めるのは、読み手一人ひとりの判断ということになる。

さて、徴候学の見方によれば、表層の歴史的出来事としては、様々なことが起き、混沌とした状況に見えるのであるが、深層においては、ゆるやかではあるが着実に人類の意識が進歩していると見る。現代では、古代エジプト時代の人間の意識と、現代人の意識はそんなに変わらないと考えられている。しかし、徴候学の見方によれば、紀元前8世紀ごろに大きな人類意識の転換が起こったとされる。

その証拠といえるのではないかと私が考えているのは、ヤスパースの提起した謎が解けることである。ヤスパースは、枢軸時代と呼ばれる時代の存在を指摘し、なぜ世界の各地にほぼ同時に大きな思想革命が起こったのかは謎であると指摘した。丁度紀元前500年前後300年のころに、

期せずして、中国の儒教、インドの仏教、ギリシャ哲学が勃興しているという事実がある。ヤスパースは、この事態をなぜだかわからない不思議な現象ととらえていた⁽²⁾が、シュタイナーの主張に依拠すれば、人類の意識が神からの神託の時代から、自ら何が正しいかを考え始める時代への移行として見るのできるのである。シュタイナー自身が挙げている証拠としては、ギリシャ悲劇の書き方が、アイスキュロスとソフォクレスの間で大きく変わっている点が挙げられている。

歴史徴候学によると、現在の時代は、西暦 1413 年に始まり、そこから 2160 年後に次の時代が来るとされている。こうなると、現代の知性はフォローできなくなって、空理空論であると断定する可能性が高いが、いわゆる近代社会が誕生する、中世以降の発展は、ほぼ 15 世紀ころからであり、ルネッサンス、宗教改革、フランス革命、産業革命、科学革命が起こって今に至っているわけだから、近代史の見方とも照応しているわけである。1413 年以降は、シュタイナー用語によれば、意識魂の時代と呼ばれ、それ以前の BC 8 世紀からの時代は、悟性魂の時代と呼ばれている。悟性魂の時代は、王や法王などにより上から命令されてそれに従う時代であり、意識魂の時代は、一人ひとりの人間が、自分で判断する時代であるとされている⁽³⁾。これこそが、民主主義の成立基盤であり、ハーバースの言う「理性的討議」の基礎となるわけである。現在民主主義が未成熟なのは、一人ひとりが自分で判断できる意識の水準にまで成熟していないことにあるということになる。そのために、えてして、意識魂を発達させるのではなく、悟性魂の時代に退行して、誰かに命令されることを望む危険性もあるわけである。全体主義へのあこがれは、こうした退行から生まれるわけである。こう見ると、現代社会の問題性を的確にいい当てていると思われる。だいたい先の話にはなるが、次の時代は、隣人愛がすべての人々に行き渡る時代であり、現在の意識魂の時代はその準備の時代であるともいわれている。この点も、エゴイズムを克服し隣人愛、友愛の世界へと移行することが、今の時代の課題であり、それに逆行しようとする力が自分ファースト、自国ファーストの主張であると見えてくる。そういう意味では、表面に現れている逆行する動きに気を取られるのではなく、深いところで、すべての人々の意識魂の目覚めが進展しているところに未来の萌芽を見るべきであるということになる。他方で、ヘイトスピーチを悪として、多様性を容認する隣人尊重の精神もまた強くなりつつあることにも目を向ける必要があるということになるのである。

3. 教育思想の取り上げ方について

従来の教育原理では、教育思想は、教育思想の近代化の文脈で歴史的に重要とされる教育思想家が並べられ、その思想家の特徴が簡潔に説明される形で取り上げられているといえる。新しい

教育原理においては、教育思想において未来の教育学の萌芽がどこに現れているかに注目して記述がなされることになる。

現在の時代の課題は、意識魂の発展、換言すれば、権威や世間の常識などに頼るのではなく最終的には、一人ひとりが自分で考え、自分で感じ、自分で判断することのできる大人へと成長することであり、唯物的科学とホリスティックな生きた精神科学を統合することであり、一人ひとりの自我の自立と成長であるという視点に立てば、コメニウスは、単に一斉教授とか、絵本の発明とか、教科書の導入とか、易より難に進むとかの点から評価するだけでなく、中世の伝統的、宗教的な知と近代の実学的な知とを統合してすべての知の体系化（汎知学）を図ろうとした点や、「すべてのものに教える」という平等思想の先駆性を強調する必要があるということになる。実際、近年のコメニウス研究⁽⁴⁾においては、近代教育学が無視してきた、コメニウスの特徴にも注目が集まってきているので、こうした新しい研究成果も組み込んでコメニウスの未来の萌芽としての思想の特徴を簡潔に整理して記述するというかたちになるだろう。

また、現在の日本の教育学において中心的な役割を果たしているジョン・デューイの位置づけについても、経験主義カリキュラムや、問題解決学習、子どもの興味への着目などが強調され、生活科や総合的学習やプロジェクト学習にもその影響が出ているが、その思想の問題点には気づかれにくいところがある。

「いかに思考するか」というデューイの主著⁽⁵⁾の書名にも表れているように、デューイ教育学は、「思考の教育」に重点が置かれている。この傾向は、現在の世界の教育学にも大きな影響を与えている、ジャン・ピアジェの発達段階論にも見られる。デューイにせよ、ピアジェにせよ、1890年代頃から始まった世界新教育運動の流れの中で理論的な指導者として大きな影響を与えた人物であり、現在の教育学においても大きな影響を与えている。しかし、さらなる未来への展開の萌芽の観点から見ると、不十分な点が発見できるのである。

4. 人智学的子ども観⁽⁶⁾

(1) 現在の教育学を支えている発達段階論

現在の日本の教育学を支えている有力な発達段階論は、ジャン・ピアジェの発達段階論である。彼の発達段階論は、よく知られているように、

- 1) 0歳から2歳まで：感覚運動期,
- 2) 2歳から7歳まで：前操作期,
- 3) 7歳から11歳まで：具体的操作期,
- 4) 11歳から14歳：形式的操作期

の四段階から構成されている。

ここでは、操作という言葉を中心として段階の区別がなされている。では、操作というのは何を指すのであろうか。操作（オペレーション）というのは基本的に知的操作のことを意味している。従って、知的側面つまりは思考の側面に重点を置いた知能の発達段階論、思考の発達段階論なのである。

この発達段階論は、感情の発達段階や、意志の発達段階については基本的に考慮していないのである。この発達段階は、論理的思考力への発達段階として構築されているのである。

従って、ピアジェの発達段階論に依拠すれば、早期からの思考への働きかけは可能であるということになる。知的早期教育を有効であるとする考え方が自然に生まれてくることになる。

最近の就学前教育において、プロジェクト学習が実施されているのも、思考の訓練が幼児教育においても可能であるという考え方に支えられているのである。

こうした考え方がすんなり受け入れられるのは、人間の人間たる所以はまさに思考力の圧倒的な優越があるという合理主義的な人間観が現代社会の常識となっているからにほかならない。

こうした現在支配的な考え方に対して、人智学的な見方においては、子どもの発達、知能の発達を中心として展開するのではなく、体を成長させる力が、心を成長させる力に変容するところから出発するのである。

(2) 変容型の発達段階論⁽⁷⁾

変容型発達段階論を、図式的に示すと、

- 1) 0歳から7歳まで（第一7年期と呼ばれている）：意志の教育の時期
- 2) 7歳から14歳まで（第二7年期と呼ばれている）：感情の教育の時期
- 3) 14歳から21歳まで（第三7年期と呼ばれている）：思考の教育の時期

ということになる。

意志の基礎が作られる一番重要な時期が、0歳から7歳までの間であり、感情（心）の基礎が作られるのが7歳から14歳までの間であり、思考の基礎ができ上がるのが14歳から21歳の間であるというのである。従って、0歳から7歳の間思考の早期教育をすると、意志の教育の基礎が弱くなるということになるのである。

人間には、思考だけではなく、意志もあり、感情もある。とすれば、人間形成を目指すのであれば、思考の発達段階の法則だけではなく、意志の発達の法則、感情の発達の法則も考慮する方がより現実的、実際的な教育が行えることは明らかであろう。

0歳から7歳の子どもは、成人がまず考えてから行動するのに対して、まず行動してみてそれから感じ考えるという具合に、大人とは正反対の反応をする。まず動くということは、まず意志

が働くということである。結果については、感じ取り自分なりに体験から学ぶことになる。こうした子どもの振る舞いからしても、就学前の子どもたちにとっては意志が中心となっていることがわかる。では、教育的な働きかけとしては、どんなことをしたらよいということになるのだろうか。自分の体を動かすのは自分の意志である。自分の意志に反して足が動きだしたら大変なことになるが、そうはならない。ということは、意志は、その人の手足など体の動きによって実現されるということである。従って、幼児は、まず自分の体をいろいろ動かしてみ、自分の意志の通りに体が動くように練習する必要がある。0歳から7歳までの時期は、体自体が急速に成長する時期でもあるので、成長する体にあわせて体を意志通りに動かす練習が必要となるのである。

また、0歳から7歳までの子どもは、強力な模倣力を持ち、模倣が大好きで、様々な模倣をする事が知られている。この模倣の強力さは、幼い子どもの言葉の学習力に現れている。大人になって、新しい言語を学ぶのは至難の業である。ところが、幼い子どもは、誕生してから3年ほどの間に、母語を話せるようになる。これは、幼い子どもたちの模倣力が強力なことを示している。つまり、第一7年期の子どもたちは、模倣によって学ぶのである。観察して見ればすぐわかることであるが、幼い子どもは、大人の振る舞いを長い時間かけてじっと観察し、表情の細部に至るまで見事に模倣することができる。大人の振る舞いは、その大人の意志と感情と思考の表れとして表現される。ということは、大人の振る舞いを正確に真似すると、子どもは自分の体の動きを通して、その時その大人が感じていた感情、考えていたこと、意志を自分の中で体験することができるのである。

従って、この年齢段階の子どもの学びは、模倣活動によってなされるのである。就学前幼児の教育を行うには、まわりの大人の振る舞いが、意志の点でも、感情の点でも、思考の点でも模範的であることが、良い教育の条件ということになるのである。この時期は、体を動かすことによってしか学ぶことができないので、じっとして話を聞くことによって学ぶことができないのである。だから、テレビや映像を見せても、映像は見る側が角度を変えて別の側からじっくり観察することができないので、精密なじっくりした正確な模倣ができず、心身を成長させる模倣にはつながらないのである。テレビを見せすぎると言葉の発達が遅れるというのも、正確な模倣ができないからである。

幼い子供の頭脳に働きかけると、体を使わないで頭を使うことになる。まだ、思考力が自立しておらず、体で学習する段階の子どもにとっては、早期の知的教育は、体による学びを困難にし、生成途上の脳や神経などの形成にも悪影響を与える危険性がある。また、意志の育成にも悪影響が与えられることになる。

最初の7年間で、体の基礎ができ上がってくると、体を成長させる力は、心を成長させる力に移

行し、体を通した意志の教育の段階は終わり、心を通した感情の教育の段階に移ることになる。そのために、0歳から7歳までの教育のあり方と、7歳から14歳までの教育のあり方は、質的に変容する必要があるということになる。

(3) 7歳から14歳（第二7年期）の特徴

感情の教育の段階といわれる第二7年期は、最初の2年4ヶ月の段階（7歳から9歳4ヶ月まで）では、まだ模倣力が残っているが、言葉による教育が中心になる。体験ではなく言葉による教育が中心となるわけである。とはいえ、言葉とは言っても、論理的に理屈で説得するのではなく、子どもの感情に訴えたり、具体例やイメージに訴えたりする物語的な言葉による教育や、尊敬できる先生のいうことだからそのまま受け入れたいといった形での学びが中心となる。理屈に訴えられるようになるのは、14歳以降なのである。

ピアジェの知能の発達段階との関連で言えば、ピアジェの理論では、14歳で、形式的操作の段階が完成するとされているので、シュタイナーの発達段階論の場合は、論理的操作が完成した後で、はじめて、理屈に訴える教育、思考力に訴えかける教育が可能になると考えられており、思考力が自立する前に論理的な思考力に訴えて教育するのは、早すぎると考えられているわけである。この点においては、詳述する余裕はないが、デューイの思考を中心に据えた教育の考え方においても、意志の教育や感情の教育に支障が出る危険性があるということになるのである。

ピアジェの発達段階論とシュタイナーの発達段階論では、年齢区分は類似しているが、もっぱら思考に訴える論理的な知育は、意志の発達、感情の発達が一段落して、思考力が成熟した後で、行う方がよいと考えるか、最初から知育をおこなった方が思考力が延びると考えるかの違いが出てくる。これは、同じ発達現象を観察しているのであるが、ピアジェの方は知能に焦点化して発達段階を特徴づけているのに対して、シュタイナーの方は、意志の教育が適切な時期、感情の教育が適切な時期には、それぞれ、意志教育、感情教育を重視し、思考力が自立してから論理的思考力に働きかけるほうが、思考力自身も豊かになると考えられているのである。

したがって、7歳から14歳までの教育で大切なのは感情教育に大きな役割を果たすことができる芸術的要素を多く取り入れることと、教師が、生徒から畏敬の念を抱かれることが大切となる。シュタイナー教育では、教育芸術という言葉が使われているが、通常教育技術と呼ばれることの多い教育方法を教育芸術と呼ぶことにより、教育の中に芸術的要素を入れていくことの大切さと同時に、人間形成は、技術のように同じ結果を目指すのではなく、一人一人が持っている唯一的な個性的で健全な人間性を開花させていくことを目指しており、唯一性を創造する営みである芸術と教育に共通性があるということを指摘しているのである。

実際、シュタイナー教育においては、エポック授業という方式が取られているのであるが、こ

のエポック授業というのは、平日は毎朝、二コマ分の時間4週間ほど続けて同じ科目を集中的に学ぶ方式である。この方式に対しては、小学生が二コマ分の授業に耐えられるのかという疑問が出されることがあるが、国語のエポック授業でも、絵をかいたり、詩を読んだりすることを取り入れて、総合的な授業として行われるので、子どもたちは途中で飽きたり疲れたりすることはないのである。エポック授業は、集中的に勉強することのメリットを指摘されることが多いが、二コマ分の授業をひとまとめにする事で、どの科目にも芸術的な要素を加える余裕ができるというメリットもある。

14歳から21歳の間は、思考の教育の段階とされているが、この年齢段階においては、思考、感情、意志のそれぞれに働きかけることができるようになるということでもあるので、この発達段階の理論では、思考の教育ができるようになるということであり、思考の教育だけに集中するというわけではないので、随時、感情の教育や意志の教育を混ぜるのが人間形成にとっては重要であるということになる。この点誤解されることが多いので注意する必要がある。

5. 新しい教育原理のあり方について

以上、簡単に、人智学的な観点から、教育史、教育思想、発達観について説明を加えてきた。いずれの内容に関しても、今までの教育原理での説明とは異なった見方が提示されている。このように、人智学的な見方に立って説明を加えていくと、従来の説明とは異なった新しい教育学の方向性、新しい教育実践の方向性が見えてくる。従来の教育学の見方、教育原理の記述の仕方を否定するのではなく、その見方をより現実的、より体系的、より発展的に示すことができるという可能性が示唆されたのではないかと思う。

この見方の妥当性の根拠が問われるであろうが、基本的に教育的な言明の妥当性は、実際にその見方に依拠して実践してみたときに出た結果によって確認されるべきものであり、実践結果によって、見方や記述をさらに洗練させていくことにより、より現実的で効果的で洗練された教育原理が可能になっていくのであり、つねにより現実的で効果的な記述へと成長していくものなのである。従って、現場においては、新しい一つの見方としてこの見方を実践してみてそれぞれの現場にあった効果的な実践を見出すための手掛かりとして参考にしてもらうことが重要となる。新しい教育原理は、現場で洗練するための指針としての役割を果たすことになるのである。

人智学的な教育実践の効果は、1919年に初めて創設されたシュタイナー学校が、現在では世界で1,100校を超えており、近年では中国においても50校が誕生しているという事実の中に示されていると見ることもできる⁽⁸⁾。

6. おわりに

実は、教育原理全体を体系的に構成するためには、様々な教育的領域において、人智学的な観点から再構成してだけでなく、取り挙げる内容領域の順番自体を、体系的に組み立てる必要がある。その順序と構成内容については、今のところ、1. 人間観, 2. 子ども観, 3. 社会観, 4. 歴史観, 5. 教育の目的, 6. 教育の内容, 7. 教育の方法, 8. 教師観, という構成がベストではないかと考えている。まだ構想の段階ではあるが、新しい教育原理のあり方の一つの可能性として受け止めてもらえれば幸いである。

《注》

- (1) Steiner, Rudolf 1982 “Geschichtliche Symptomatologie” (Rudolf Steiner Verlag, Dornach/Schweiz)
- (2) ヤスパース著、重田英世訳『歴史の起源と目標』理想社、1964年
- (3) シュタイナー著、今井重孝訳『社会問題としての教育問題——自由と平等の矛盾を友愛で解く社会・教育論』（イザラ書房、2017年）
- (4) 北詰裕子著『コメニウスの世界観と教育思想——17世紀における事物・言葉・書物』（勁草書房、2015年）
- (5) Dewey, J. “How We think” (D. C. Heath & C., 1910)
- (6) パツラフ、ライナー他著、入間カイ訳『シュタイナー教育基本指針Ⅰ——誕生から三歳まで』（水声社、2014年）：パツラフ・ライナー他著『シュタイナー教育基本指針Ⅱ——三歳から九歳まで』（水声社、2015年）、参照。なお、基本指針Ⅰには、今井重孝による「本書の理解を深めるために」（211-239頁）が収録されている。
- (7) 今井重孝著『“シュタイナー”『自由の哲学』入門』（イザラ書房、2012年）81-95頁、参照。
- (8) 今井重孝「三つのシュタイナー学校卒業生調査の主要結果について」『教育人間科学部紀要』第一巻 2010年 53-68頁参照。卒業生調査結果により、シュタイナー教育が優れた教育成果を示していることが読み取れるので、シュタイナー教育の考え方が実際に効果があることがわかる。

(提出日 2017年9月30日)